

もの言う牧師のエッセー 第182話

「桂米朝」

上方落語の名跡、桂米朝さんが、去る3月、89歳で亡くなった。漫才や喜劇の人気に押され、自身の入門当時には風前の灯だった戦後の上方落語を復興させた米朝さんではあるが、実は彼は知性派、学者肌と評された。入門後に多くの師匠の下に通って、古典を覚え文章に書き留めた。そこから時代背景や登場人物の性格などを徹底分析、現代に合わない部分はそぎ落とし、今風のアレンジを施し演じて見せた。「米朝が芸者を3人呼んだら、年齢の合計が軽く200を越す」と、彼と親交のあった作家の小松左京の弁。年長の芸妓から、古いお茶屋遊びや成り金の愚かな散財など、昔のエピソードを教えて貰っていたのだ。演者が絶えていた上方落語を掘り起こして記録を見つけ、長老と呼ばれるような人々から昔話を収集。

その結果、一時は若手数人にまで減った上方落語の復活ぶりは見てのとおりである。正統派の柔らかな語り口としっかりした話の構成で、東京など各地の落語会でも多くのファンが聞きいようになり、米朝一門は孫弟子まで含めると60人を数え、上方落語界の一大勢力になり、上方落語界初の人間国宝、おまけに演芸界初の文化勲章受章者にまでなった。

「様々な分野を通じ、この人のように復活と新展開という劇的な活動を一人でやってのけた人は古来幾人いるだろうか」と言った司馬遼太郎の言葉を聞いて、キリストの生涯と、聖書の言葉、

「神の子は、神様の栄光を受けて、まばゆいばかりに輝いています。また、その人格と行動全てにおいて、神であることを示し、力ある言葉によって、宇宙を統御していられます。そればかりが、私たちの一切の罪の記録を消し去って清める為に、死んで下さいました。そして今は、最高の栄誉を受けて、天におられる偉大な神様のそばに、座っておられるのです。」

ヘブル人への手紙 1章3節:LB、

を想起した。神であるイエスが2000年前に地上にやって来た時、イスラエルの悲惨な状況は目を覆うばかりであった。しかし彼はコツコツと村々を訪ね歩き、正統派の聖書の教えを引用しつつも、難解な説教ではなく、金や酒、家族など、人々の日常の話題から優しい語り口で福音を説かれたのだった。人々の罪を背負って十字架にかかり殺された後に復活し、天に昇って神の右の座に着かれた後の彼の人気ぶりは見ての通りである。日頃何気なく使っている西暦のカレンダー、日曜日、クリスマスなど枚挙に暇がない。“人類の宝”であるキリストの言葉に耳を傾けよう。

